橋川文三の近代日本批判

―「アジアへの加害／欧米からの被害」からの帰着―

The Modern Japanese Criticism by Hashikawa-Bunzou:
Result from "*Offending to Asia / Damage from Europe and America*"

山之城　有　美
Yumi YAMANOJOU
（日本女子大学大学院人間社会研究科　現代社会論専攻博士課程後期）

要　約

いわゆる戦中派世代である橋川文三（1922 － 83 年）は，戦中に自己存在を日本ロマン派に託した原体験を持つ故に，戦後にはマルクス主義や近代主義による日本ロマン派のタブー視を批判することに始まり，戦後日本の歩み自体に警鐘を鳴らし続けた思想家といえる。本論では戦後日本の批判を開始した橋川が，その後，1960 年代後半頃には「アジアへの加害」へ，1970 年代前半頃には「欧米からの被害」への対峙を介し，近代日本批判に帰着する軌跡を追う。なお橋川の諸作品の考察に際し，①歴史像については，1930 年代像への問題意識から明治期像へ遡る流れになっていること，②空間像については，「都市／地方」から「中心／周縁」が導かれていること，に着目する。橋川は近代日本批判の際には，近代システムが生む疎外感に対峙し得ない為に生れる優劣や好悪という相対的な非合理感情が，技術合理的思考に浸食される形で強化され続けていく様を憂慮している。特に本研究では，コンプレックスの生成と転化という現象に注目する。

[Abstract]

Bunsou Hashika(1922-1983) which is the so-called war generation, begins with criticizing the taboo view of Japanese Romantic School from Marxists and Modernists perspective, because of the prototypical experience that entrusted its own existence to the Japanese Romantic School during the war, and kept sounding the alarm about the pace of postwar Japan itself. Hashikawa triggered postwar Japanese criticism after the war, and arrived at a conclusion in modern Japanese criticism, noticing its "offense to Asia" in the second half of the 1960s and its "damage from Europe and America" in the first half of the 1970s. I focus on 1)history images of the Meiji period going back to images in 1930s, and 2)aerial images on "the center/limb" that are derived from "city/area". He concerns with the situation, that relative and irrational feelings of likes/dislikes or superiority/inferiority which born with not being able to be confronted with feelings of alienations which a system of modern produces, are eroded by rational technological thoughts. In this study, I pay in particular attention to the phenomenon that should be called generations and transformations of complexes.

はじめに

いわゆる戦中派世代である橋川文三（1922－83年）は，戦中に自己存在を日本ロマン派に託した原体験を持つ故に，戦後にはマルクス主義や近代主義による日本ロマン派のタブー視を批判することに始まり，戦後日本の歩みそのものに警鐘を鳴らし続けた思想家といえる[1)]。特に橋川は，（Ⅰ）1930年代頃に「前近代／近代」をめぐる自我の普遍的な苦悩が顕在化したことを想定して寄り添う姿勢があり，どうにもならない危機的状況のリアリティに敏感であった。それ故に橋川は実現不可能なことを承知な上で，現実を超える理想郷を「イロニイ」によって死守するというビジョンを持っていたのである。橋川のこの問題関心は，1950年代後半の初の本格的論考『日本浪曼派批判序説』[2)]［橋川　2000a］，1960年代前半に初出された『昭和超国家主義の諸相』[3)]［橋川 1964＝2001a］を通じ，近代システムが引き起こす疎外感から自己存在をどの様に守り得るか，という普遍的な問いを持つ歴史像へと昇華されている。そしてこの橋川の問題意識は，最終的に1970年代に初出された『昭和維新試論』[4)]［橋川　2013］にて，明治期像にまで遡って改めて語り直されている。

本研究では1970年代前後の橋川が，①1930年代像から明治期像に遡る歴史像を持ち始めていたことを押えながらも，特に②「都市／地方」というパトリオティズムに端を発する元々の問題関心から「中心／周縁」を導くかたちの空間像を持ち始めていたこと[5)]に着目してみる。この時期の橋川には，（Ⅱ）外在的圧力に対峙し得ない故に，自己の「実感」が黙殺されてしまう危機的状況においては，まず自己信頼感や自己肯定感が弱まることでコンプレックスが「生成」され，さらにそのコンプレックスが新たに「転化」されるという2段階の現象を見通す視座があったといえる。特に本論では橋川がこのコンプレックスの「生成」と「転化」という2段階の現象に際して，1960年代後半頃からは「転化」先であったとされる「アジアへの加害」[6)]へ，1970年代前半頃にはコンプレックスの「生成」源であったとされる「欧米からの被害」への対峙の試みを介し，近代日本批判に本質的に帰着にする軌跡を追う。橋川は近代日本批判に際し，近代システムが生む疎外感に対峙し得ない為に生れる優劣や好悪という相対的な非合理感情が，技術合理的思考に浸食される形で強化され続ける様を憂慮しているのである。

その上で，本論の章立てを以下述べることとする。1章では『黄禍物語』［橋川　2000］を素材とし，1970年代前半頃の橋川が欧米列強から受けていた潜在的な人種差別の被害を問う際に，（Ⅱ）日本が欧米コンプレックスに無自覚のままにその感情をアジアに転化してきたこと，を論じていたことを示す。橋川は人種「神話」を2段階で捉えており，第1段階の「黄禍論」とは未知の人種を理解し得ないとする恐れや不安の感情に起因するもので，第2段階の「新黄禍論」とは合理的「科学」の名で人種的優劣を正当化することで過激化したものであるとしている。

2章では遺稿に至る1970年代全般の橋川の作品である『西郷隆盛紀行』［橋川　2014］に掲載された明治維新期頃をめぐる諸論考を扱うことで，国内における「中心／周縁」の優劣の差別意識の再生産に着目しながら「日本近代」自体の在り方を最終的に問うていることを述べる。その際には橋川がまず，（Ⅱ´）「中心」へ対峙し得ずに恐れや不安を「生成」するに至った「周縁」が，そのコンプレックスをさらなる「周縁」に「転化」させる動き，という2段階に着目していることをおさえる。なお橋川のこの2段階の認識は，1章でいう所の，「黄禍論」によってコンプレックスの「生

成」が生れ，その後の「新黄禍論」でコンプレックスの「転化」が生れた，という2段階の人種差別の歴史像の認識に本質的に重なっている。さらに２章では橋川が，危機的現実を心情的に克服する為の「イロニイ」表現の語り直しにあたるものとして，（Ⅰ´＋Ⅱ´）「周縁」のさらなる「周縁」において革新的契機がイロニイとして生れていたとみていることをおさえる。さらにここでは橋川が，「友愛」関係にある同志に決定的に裏切られた場合にその衝撃で生まれざるを得ない反動としての負の感情には「イロニイ」を見出し受けとめる一方で，外的圧力としての「西洋的な論理」に浸食されることで生まれた優劣感情には「実感」を伴わない自己欺瞞なるものを捉えて問題視していることも浮き彫りにする。

橋川には元々「前近代／近代」を心情レベルで検討する発想があった為，本来は外交交渉をめぐる実務や制度レベルで認識されていたはずの「アジア／欧米」をめぐる諸問題もが心情レベルで認識されている傾向がある。特に橋川には，「アジア」には「前近代」を見出して価値を置く一方で，「欧米」には「近代」を見出して批判するという特徴が強い故に，「アジア」や「欧米」さらには「日本」にもともと固有に存在したはずの多様な実体が時として単純に捨象されてしまっている。その為本研究に際しては，この橋川の特色にも留意していきたい。

１章　欧米コンプレックスとの対峙に向けて　―1970 年代前半―

１－０　欧米列強からの被害への問い

1970年代前半の橋川は1970―76年に初出した『黄禍物語』[7]［橋川　2000］にて，まず，日本の戦争の動機に「帝国主義戦争一般の論理とは異なる深層心理の作用」である「「白に対する黄」の叛乱」を想定しながら，「人種的偏見を動員するやり方」に着目している［橋川　2000：230－231］。このことからは，帝国主義をめぐる従来の分析方法においては列強が強制した不平等条約や植民地政策等の実務的外交交渉が争点とされてきたといえるが，橋川の場合には人種主義という潜在レベルでのイデオロギーに焦点を当てていることが分かる。

特に本作品ではこの時期の橋川が，戦後のアメリカ国内で複雑化する差別構造について，「かつては「黄人の反乱」とよばれただけであるが，それは，いまや「黒人の反乱」と，あらゆる少数もしくは被圧迫者グループの反乱と結びつく巨大な地すべりの時代となっている」［橋川　2000：256］と認識していることが分かる。さらに本作品で橋川は，アメリカによる人種差別が国内のみならず国外へも連続しているという認識を持ちながら，戦後のベトナム戦争によって戦中の原爆投下を想起させてもいる。ここで橋川はアメリカによる人種差別の本質について，「彼ら（アメリカ兵）は“ヴェトコン”はもとよりそれに協力する住民を「ポーク（豚）」と呼び，無差別にこれを虐殺してもなんとも思わないでいる。彼らの心理においては黄色人種は人間の姿をした奇妙な野獣であり，人間の理性では理解することの出来ない不気味な習性をもった存在に見えたのであろう」とみている。このことからは橋川が，「理性」では理解し得ないという理由で「不気味」な人種の存在を消し去ることに対するアメリカの深刻な無自覚性を見据えていることが分かる［橋川 2000：243－244］。特に橋川の語る「虐殺してもなんとも思わない」というニュアンスには，敵対心の感情さえ生まれないという究極の心理状況が示唆されていることが窺える。その上で橋川は，

アメリカの内省の契機について「ベトナム戦争が人種戦争に他ならないということは…アメリカではかなり公然と指摘されている」と捉えながら，ベトナム戦争が「…この問題（原爆の最初の使用が人種差別に関係あるかに関する原爆投下論争）に関する有力な傍証の多くを提示」していると唱えているのである［橋川　2000：278］。

一方で橋川は戦後の日本が抱えてきた問題として，「野蛮な黄色人種に対する神の如き白人の怒りという意味をもった」原爆を被ったといえども，アジアに対して同様の残虐を行なった「日本は人種差別に対し抵抗し，抗議する十分な資格はもたなかった」ことを主張している［橋川 2000：244］。そして橋川は戦後において日本が迎合してしまった人種差別として，朝鮮戦争時の中国人民義勇軍への恐怖心を挙げてもいる［橋川　2000：284］。ここで橋川は，日本の中国への恐怖心はアメリカが中国にイメージするモンゴルのジンギス・カン再現の生々しさとは異なるであろうものの［橋川　2000：284］，日本もアメリカやヨーロッパやソビエトが共通に持っている様な「あの顔のない大衆，残酷で，無神経な人間以下」の人種として中国のイメージを抱いてしまっており，その恐怖心や差別心は「共産主義」あるいは「アジア」といったイデオロギーの連帯よりも強力に働き得ると指摘しているのである［橋川　2000：288］。そして橋川は，人種的優劣感から脱し得ないままの戦後日本が，アメリカ追従によって人種差別の被害性を無自覚化していく中で，ドル危機やベトナム戦争挫折のコンプレックス転化といった新たな黄禍論の被害を受けていることも，経済的脅威を人種的反感に転化させたかつてのアメリカの排日移民法案を想起しながら語っているのである。

以上を踏まえ本章では本作品における橋川の歴史像が，「アジアへの加害／列強からの被害」という対の関係性を通じ，日本自身の問題として捉えられていることに着目していく。なお本章では，1節で扱う明治期を中心とした「黄禍論」，2節で扱う大正期から昭和期にかけての「新黄禍論」，という2段階の人種差別が生れていたことを念頭にしつつ，日本が西欧列強から受けて生成させたコンプレックスをアジアへ転化させてしまう現象に焦点を当てていく。

１－１　恐れから優劣感に染まった人種「神話」

１－１－１　非合理感情の生成とエリートの屈折
―日清戦争期頃まで（1890年代頃：明治期）―

橋川は，「それ（黄禍）は，白色人種の黄色人種に対する恐怖，嫌悪，不信，蔑視の感情を表現したもの」であり，「人類社会に伝承，形成されてきたさまざまな人間差別の心理的複合体のうち，もっともながい歴史をかけて作り出された膨大な「神話」」［橋川　2000：7］であると述べ，特に黄禍論のハデな推奨者はロシア皇帝・ニコライ二世を扇動してアジアに向かう外交的術策を掲げたドイツの皇帝・ヴィルヘルム二世であったとしている［橋川　2000：20－21］。橋川は，このドイツのカイゼルが人種主義者であったヒューストン・スチュアート・チェンバレンの「虚栄心に媚び」て「空想的な人種学説に心酔」したことが黄禍論の推進を許す要因になったとみている［橋川　2000：29］。西欧の外交政策決定の深層に潜む人種「神話」の本質を西欧自身に内在する「虚栄心」への「媚び」と捉えていた橋川は，人種主義の原因とされる恐れの感情は自己存在を外

在的なものとして相対化してしまうことで生まれるとみていたことが窺える。

その上で橋川は，明治期頃の日本のエリート達が西欧列強から受ける人種差別に理論的に対抗出来ずに，その人種「神話」によって屈折していった様を描いている。まず橋川は，「ドイツびいき」が仇となって三国干渉の動向を察知出来なかった明治期外交官・青木周三を引き合いに出し，「カイゼルはもとより，ヒットラ―もまた，決して黄色日本人に敬意や愛情をいだいてはいず，むしろその逆であったのに，どうしてそういうタイプが生れるのか，ちょっと奇妙な感じがしてならない」といぶかしんでいる[橋川　2000：24－25]。こうした橋川の語りには，「虚栄心」に基づく「媚び」や「ひいき」といった感情は「敬意」や「愛情」とは逆の感情であるという認識がとれる。また橋川は―安岡章太郎が語る―鴎外論の解釈を引用しつつ，森鴎外は哲学としては人種理論への生彩ある紹介・批評が出来ていたが，グロテスクなナンセンスさのこもった「白人の黄人恐怖ないし蔑視の感情的複合体として提示された場合には，やはり，これに対し感情論を以て応酬するか，黙殺するほかはないのに，それ（人種主義を理論として扱うこと）を抑制せざるをえなかった」と述べることで，その抑圧された感情を捉えようとしている[橋川　2000：43]。

一方で橋川は，独自のやり方で人種主義の本質を捉えようとした人物達についても語ってもいるのである。まず橋川は，「偏狭な民族的優越感の色どり」を持たない田口卯吉の日本人種起源論について語っている。その際に橋川は「河上肇がチェンバレンの人種論をそのまま逆に日本民族に適用しようとしたのとも異なり，あくまでそのオリジナルな研究の立場から議論を展開している」[橋川　2000：53]として評価するとともに，日清戦争期頃という「日本近代化の初期段階において，いち早く日本人が自己の本源的性格について屈折した関心を抱かざるを得なくされた」ことを注視している[橋川　2000：59]。そして橋川は，「もともと黄禍論ないし一般的には人種差別の根源は科学的な理性の問題ではなく，人種相互間の生理的あるいはセクチュアルな好悪の感情の表現であることが多く，その意味で極めてエロチックな非合理的要因と結びついている」とし[橋川　2000：58－59]，田口が明治期においては珍しく黄禍論が美醜の問題とセックスの問題に関わることを示唆していることも評価していた。

さらに橋川は，この田口の示唆した生理的好悪感に露骨に言及した人物として軍人・佐々木到一も関連付けて挙げている。橋川は，第一次大戦後の混乱期に白色人種を軽蔑する「うぬぼれ」が日本の軍人に生じた様を佐々木が見抜いていたとした上で[橋川　2000：161－162]，佐々木が「英米に対するアジア人としての共感」や「尊敬」や「愛情」を持って国民党要人の多くと親交を結びつつも，後には日本の軍部の思想的骨格である白人蔑視と軍事謀略に準じて張作霖爆殺の一役を担うに至ったとみている[橋川　2000：164－165]。このことから橋川は佐々木が持っていたとされる「共感」や「尊敬」や「愛情」について，「うぬぼれ」から生れる「軽蔑」と対比させるかたちで評価していることが窺える。

１－１－２　民衆へ浸透し始めた自己対峙なき「黄禍」
―日露戦争期直後まで（1900 年代頃：明治期）―

橋川は日露戦争期頃の像を語るにあたって，まだ多くの日本の民衆が黄禍・白禍を認知し得てない状況であった日露戦争前に，黄禍論の下地といえる攘夷論や脱亜論，および素地として黄色

人種と白色人種の競争を想定する高山樗牛らのイデオロギ―があったことを述べている[橋川 2000：69－70]。ここで橋川は，樗牛の考えとは，当時の幸徳秋水や内村鑑三などの理想主義者の思想と比べると劣るものの，「当時のナイーブな日本人の多くの気分」の象徴として，「自己の内部に何らかの意味で「黄禍」感覚（白色人種への劣等感を含む）をいだくことはなかった」とみている[橋川　2000：73－74]。実際の所，当時の帝国主義下での民衆の切実な希求としては，不平等条約の改正などの法レベルでの認識があったものと思われるが，橋川の場合はあくまで法レベルの契機として心情レベルを軸とするという特徴がある。

その上で橋川は日露戦争後について，「日本という黄人の小帝国が，ロシアという大白人帝国を打破ったという事件」を境に「黄禍の声が一種コーラスのように西欧社会にひろが」り[橋川 2000：74]，日本の動向に対する警戒心が欧米に高まったとみている[橋川　2000：85]。そして橋川は，そのことによって「当時，一般には白人帝国ロシアを打破ったという自負心と，果してその戦勝はかけねなしの完勝であったのかという疑惑とが日本人の心理を重苦しくとざしていた」とし，その失望と幻想がポーツマス講和条約に際した国民の暴動に現われたと捉えている[橋川　2000：90－91]。ここで橋川は，この心情は民衆のみならず「多分岩倉や木戸や大久保や伊藤などの人々」にもあり「彼らは恐らくは人種的劣敗性を代位補償するためにあの万国無比の「国体」を考え出した」のではないか述べ[橋川　2000：101]，政治家たちの劣等感が「国体」という優越感の創作を通じて民衆に普及した可能性をも指摘している。実際の所，近代日本における「国体」とは近代国家の創設に起源があり人種主義とは別物であると考えられるが，「国体」を欧米コンプレックスの反転と捉えようとする橋川の試みには，フィクションとして悔し紛れに「真実」を浮き彫りにしようとする姿勢が窺える。

一方で橋川は，日本における優劣感の甘受状況に対比させる意図を持って，「黄禍」に翻弄されなかったとされる中国に理想をみている。橋川によると，日本は帝国主義国家に成長しつつあることを「黄禍」として認められるという「虚栄心に媚びる」スタンスさえあった様にみえるのに対し，中国は「黄禍」という概念はナンセンスで理解し得ないものとみなすスタンスであったとされる[橋川　2000：102]。しかし実の所当時の日本は，西欧列強による日本への警戒心を象徴する「黄禍」に対しては敏感で複雑な心境であったと考えられる。さらにここで橋川は，中国における「「皇漢民族」としての誇り高き伝統へのアピールと，その奴隷根性の根強さに対する痛罵との結合という姿勢」というナショナリズムと痛烈な自己批評には，「黄禍」への対応の本質がみえると捉えている[橋川　2000：105]。しかしこれについても実際の所，中国が「黄禍」の感覚を持っていなかったのは，中国文明に対する高いプライドと，それと裏腹の民族および国民感覚の弱さ，に拠るものとみる方が適切であり，中国自身の内省に直接起因するものとはいえないはずである。その為，中国と日本を相対的な対照的関係でみるという橋川のこれらの視座には一定の意義があるものの，それ故に捨象されてしまう観点があることも否定出来ない。

また，橋川が日本と中国の「黄禍」認識の実体への配慮が弱い側面は以下にも見受けられる。橋川は，中国では「黄禍は単に外から襲いかかる危険ではなく，むしろ民族内部の精神にかかわる問題としてとらえられている」と唱える一方で[橋川　2000：105－106]，日本では「黄禍はどちらかといえば外から理由なくふりかかってくる偶発的事件であり，それに対しては，ただその誤解をとくという弁明の姿勢か，もしくは逆に白色人種への反感嫌悪をもって対抗するという姿

勢があっただけ」と論じてもいるのである[橋川　2000：118]。但しここには，「弁明」や「反感」や「嫌悪」について，内省に基づく自立が出来てない故の外的環境への「転化」なるものとみなす橋川の鋭い問題意識もとれる。

１－２　合理的に正当化される非合理感情

１－２－１　劣等感の転化

—日露戦後以降～戦間期頃（1910 年代頃～ 1920 年代頃：大正期）—

内省に基づく自立に価値を置く橋川は，中国自体のみならず列強自体が内省する姿勢にも理想を見出している。橋川は，列強による中国への侵入が列強の被害者面によって正当化されていることを批判する物語を描いたイギリス人・ディキンスンを評価している。橋川はディキンスンが著した物語の内容について，「中国人の口から語らせているのは，…不正を見のがすことのできなかった，ディキンスン自身の叫びである。彼は英国では中国人の方を加害者のように決めこんでいるのにガマンがならない」とし[橋川　2000：138]，列強自体に潜む欺瞞性の告発に着目している。そして橋川は帝国主義政策批判として，「元来自分たちの土地に外部からやって来る強大な侵入者に対して，退去を余儀なくされた側の試みるささやかな抵抗が，あたかも残虐な加害者の行為のように言いたてられること」を指摘することで[橋川　2000：139]，「被害／加害」の転倒を念頭にしている。さらに橋川は踏み込むかたちで，ディキンスンが「宣教師をムリに押しつけ，彼らが無知から来る熱心さで住民を怒らせ，宣教師が害をこうむろうものなら，それが新たな収奪の口実とされる」ということを示しながらキリスト教文明への批判をも意図していたとみて評価している[橋川　2000：141]。その上で橋川は，「力は正義」という列強の専横に憤っていたディキンスンが労働党政権下の審議委員になった際に，武力によらない国際的秩序を求めて「国際連盟」の構想を作ったが，その後に政権が保守党に移った関係で委員を降りねばならなかった事情で挫折に至ったことをおさえている。

中国や列強のスタンスを引き合いに出しながらも橋川は日本自体に内省の自覚的契機が弱かったことを問う意図で，欧米列強とアジアの中間に置かれた末にアジアに矛先をむけるというコンプレックス転化の二重構造があったことを問題としている。ここには橋川が，被害者としての中国と加害者としての列強との狭間に日本が位置づくイメージを持っている為に，「加害／被害」の両面への内省が必要な立場であることを想定していることが窺える。橋川は当時の日本人の心情変化を象徴する人物として近衛文麿を挙げ，青年期の近衛は人種問題を憂い国内と国外の革新を目指したものの後年は不透明で屈折したと述べている[橋川　2000：158－159]。その際に橋川が「近衛の悲劇」として「日本という黄色人帝国の最高貴族であった」ことを語っていることからは[橋川　2000：159]，近衛自身が欧米列強からの人種差別の受け手という側面だけでなく，アジアに対する構造的人種差別へ関与していることにも橋川が着目していることが分かる。また橋川は，当時の日本が国際連盟に提示した人種差別撤廃議案について，「この時日本政府がはたして真剣に人種差別の撤廃を考慮したのかといえば，それは大きな疑問である」と語りながら[橋川 2000：161]，日本自体がアジアへの加害性を省みないかたちで列強からの被害性だけ唱えること

の矛盾も示唆している。さらに橋川は，独が英米から受ける憎悪を日本へ転化させる恐れを抱きながらも日本は独と同盟していたという奇妙さを描くことで，「聖戦」の奥底にあるモチーフが露骨な人種的優劣感に根ざしていることを想定している［橋川　2000：171］。

１－２－２ 「新黄禍論」という絶望的抑圧での倒錯
―戦間期以降頃（1930 年代以降頃：昭和期）―

橋川の『黄禍物語』［橋川　2000］における1930年代像としては，西欧列強から受ける絶望的抑圧によって生れた倒錯が語られていることを示してみたい。なお橋川はこのいわゆる戦間期以降に際しても，国際政治を舞台としたロンドン条約やワシントン体制という法・制度レベルの実務交渉の話ではなく，深層レベルでの人種主義をめぐる葛藤に焦点を当てている。このことによって橋川は，いわゆる「右翼」や「ファシズム」としてタブー化されてきた人々に内在する列強への倒錯した抗いの真意を，平和主義と唄われている人物に内在する列強への合理的な屈従と対比させることで，浮き彫りにしようとしている。

まず橋川は，日本支配層の最高エリートから成る国本社がロンドン条約問題などで強硬な白色人種不信を唱えた故に，特に西欧人から「日本ファシズムの総本山」と見なされていたことを語っている。特に橋川は，国本社のメンバーであった平沼騏一郎が，本来の儒教的精神と無縁なものとして「漢学」を白人攻撃の道具に用いた結果，大正期から昭和初期にかけて「皇道主義的汎アジア主義（＝すめらあじあ）」が生み出されたとしてその排他性を問題視している［橋川　2000：176－177］。その一方で橋川は北一輝を引き合いに出しながら，北が人種論を媒介として皇道哲学へ走った国本社を軽蔑し，全体の思想からみれば人種哲学に染まっていなかった人物とみて評価している［橋川　2000：183］。但し橋川は北一輝さらには大川周明などについて，政治論・文明論の見地から黄禍に対する白禍の強調をしたに過ぎない故に，「人種としてのアメリカ人やイギリス人の劣等性を学問的に主張してものではな」く，「白人と闘うことには一種のコンプレックスをいだいたはず」であり，「日本ファシズムの中には幸か不幸か科学としての人種哲学は欠如していた」と述べている［橋川　2000：195－196］。そして橋川は，日本人が人種差別の意識化や対象化を出来ずに「自己欺瞞」に陥っていることを指摘し，このことが同じ黄色人としての「アジア」への差別行動の要因になったとみている［橋川　2000：198］。これらのことから橋川にとって，日本人による「アジア」への問題行動とは，日本人が「欧米」に内在する「人種哲学」の問題性に対峙出来なかった為に副次的・相対的に生まれたものとみなされていることが分かる。そして改めて，橋川は本質的に日本人自身の問題として「アジアへの加害／欧米からの被害」の両面を受け止めているといえる。

さらに橋川の語りには，白人優越という絶望的抑圧で倒錯したタイプとして田中義一や松岡洋右らを挙げている。橋川は彼らを描く際に，合理的思考を重視し欧米に追随したとされる幣原喜重郎と，対比させる構図をとっている。橋川は第一次世界大戦後の「新黄禍論」の要因について，「古い「黄禍」「白禍」という…非合理的な発想は，それぞれの国家の合理的な経済問題によってとってかわられ」たこと［橋川　2000：209］，あるいは「人種問題はそれ自体として世界の問題ではなく…諸国家間の政治，経済，外交に従属するものにすぎな」くなったことに起因させながら［橋

川　2000：217]，いわゆる近代システムに染まっていく世界の状況を捉えているのである。その際に橋川は幣原については，「移民法の場合についていえば，それが正義公平の観念にそむくことを認めつつも，相手側の政治的措置は合理的に承認しうるという立場」であることを問題視しているのである[橋川　2000：211]。そして橋川は，一般的には国際協調主義といわれる幣原外交への強硬な非難を擁護すべく，「幣原外交の非難者たちは，移民法そのものの背後に黄色日本人への嫌悪と軽蔑がひそんでいることを宣伝することによって，日本国民の反発感情を組織し，それによってワシントン体制の束縛を打ち破り，満蒙問題処理により強硬な態度をとらしめるテコとしようとした気味がある」と述べ[橋川　2000：209－210]，理不尽な抑圧を受けて生れた反発感情に寄り添っている。

一方で橋川は，一般には日本ファシズムに関与する人物として扱われがちな田中義一や松岡洋右については，彼らの合理性に回収されない非合理性を評価している。その際に橋川は，田中外交は単なる人種的コンプレックスではなく，また，田中外交以降の好戦主義・侵略主義は単なる合理的手続きでは理解し得ないとしている[橋川　2000：202]。その上で橋川はいわゆる田中上奏文という大規模な世界征服計画文書について，「人種哲学に代位するものとして民族の政治神話の優越性が掲げられ」，「白色人種への恐れや崇拝の影がそこにはもはや認められず，ほとんどニヒリズムに近い力の支配という思想のみが貫かれている」というかたちで，1930年代の「新黄禍論」の倒錯を語っているのである[橋川　2000：208]。この田中上奏文については現在では偽書であることが定説化し，誰が何の為に言文を書いて流布させたのかという問題関心が高まっている状況にあるといえるが，当時の橋川は留保を付けながらも，あえてこの流布された陰謀説というフィクションに内在する「真実」に意義付けていたものと考えられる。また橋川は，一般的にはアメリカを敵対視する外交を展開していたとされる松岡を語る際にも倒錯を念頭にしており，本来の松岡はアメリカに対して冷静・穏健であったことを押えている。特に橋川は，松岡が「アメリカによる人種差別の現実は，いわば日米文明の統一というより高い理念によってのりこえられ，日本による中国民族への差別意識は，「立体的の東洋文明」という高尚な理想によって止揚できる」と考えながら[橋川　2000：216－217]，「人種意識という劣性の人間的コンプレックスと，ほとんど誇大妄想ともいうべき文明論的理想主義」を「不思議な形で結びつ」けていたと述べている[橋川　2000：215]。この松岡を語る際の橋川のスタンスにも，「アメリカからの加害／中国への被害」の両側面が念頭に置かれていることが分かる。

2章　国内でのコンプレックス転化への反省　―1970年代全般―

2－0　日本近代への批判

本章では橋川の最終的な帰着点が，「アメリカからの加害／アジアへの被害」の両面に対峙しきれてない戦後日本を問うべく，その原因を明治維新期頃まで遡ることで日本近代への批判の視座に至っていたことを論じたい。橋川が1974年に初出した論考「日本文化・フォニイ史論雑考」[橋川　1974＝2001b]からは，橋川が山口昌男の提示した古代ギリシア神話以来の「フォニイ（真理によく似た虚偽・まがい・もどき）」という文化の構造的「周縁」で「本物／偽物」を架橋するとさ

れる表現形態に着目していることが分かる。本章では橋川が1977年に初出した「西郷隆盛と南の島々－島尾敏雄氏との対談」［橋川　1977b＝2014］や1978年に初出した「西郷隆盛と征韓論」［橋川　1978b＝2014］を中心に取り上げる[8)]。この時期の橋川は文化人類学的な構造主義の台頭を背景に「中心／周縁」に着目しているが，橋川は「中心」の圧力に抗えない故のコンプレックスが「周縁」に転化されていくという優劣の構図を通じて日本近代像を語っているのである。ここで橋川は，―「はじめに」でいうⅡ´として―非対称性が再生産される構図が西郷軍内部や薩摩藩等にも内在していたと語りながらも，島流しといういわば「周縁」のさらなる「周縁」で西郷が現実を超えるべく「夢想」したと想定している。

さらに橋川は，―「はじめに」でいうⅠ´として―西郷の征韓論を擁護する際に「敬愛」関係にあるはずのアジアから裏切られた反動によって生まれざるを得ない感情に「イロニイ」を見出し，後に，その国内外一体化した革新性を内在させた「イロニイ」は「西洋的な論理」の浸食によって疎外されていったとみている。原体験である日本ロマン派を「イロニイ」という意義付けで擁護し続けてきた橋川は，右翼の源流というレッテルを西郷に付けてきた近代主義者やマルクス主義者と改めて対峙すべく，これらの仮想敵から西郷の征韓論の真意を擁護していたといえる。

特に橋川が1980年に初出した「西郷隆盛の謎―毛利敏彦『明治六年政変』にふれて」［橋川 1980＝2014］からは，毛利の提示した西郷擁護の征韓論解釈を橋川が評価しており，これが橋川の征韓論に関する本質的なスタンスになっていることが分かる。ここで橋川は，（ア）従来の征韓論解釈として，「いわゆる外遊使節団は，帰国して征韓論の危急を見るや忽ち「内治」派にかわり，他方その間国内政治に専心していた勢力は「外政＝政韓」論を唱え」たという説を押えながらも，（イ）毛利の全く逆の新たな征韓論解釈として，西郷は「征韓論者でなく，ただ平和使節として韓国に行かんとしていたにすぎない」とする説に着目している。この新たな説には一定の意義があるものの，現代の征韓論解釈の水準が当時のアジア外交やアジア情勢の実体をより踏まえたものになってきていることからみると，こうした橋川の解釈もまた当時の認識枠組を十分に脱したものとはいえないかもしれない。

なお本章での2つモチーフである危機的状況下での（Ⅱ´）「転化」と（Ⅰ´）「イロニイ」という現象は，「反動」的な負の感情を生み出し得るという意味合いにおいては形式的に似ている様にもみえるが，橋川はこれらの契機に着目することで決定的な差異を捉えているといえる。橋川には乗り越えられない危機的現実に際し，「敬愛」といった理想の死守によって自己存在を守り得る西郷の様な「イロニイ」には価値を置く一方で，西欧からの外在的圧力である「合理的思考」への屈服から生成されるコンプレックス感情の「転化」については疎外感や自己欺瞞を深めるものとして危惧する，という視座があったのである。

２－１　優劣感による「中心／周縁」の再生産

２－１－１　「周縁」の連続　―明治維新期頃―

1970年代後半の橋川は，構造主義の影響を受け，日本国内で「中心／周縁」をめぐる優劣感情が再生産され続けてきた状況を語っている。その際に橋川は，「中心」による「周縁」への軽蔑感情

が相対的に転化されながら限りなく連鎖していく現象を浮き彫りにすると同時に，「周縁」と眼差された人々に内在する自発的契機を掬い出そうとしている。橋川が1975年に行なった対談を基にして1977年に初出した「西郷隆盛と南の島々　―島尾敏雄氏との対談」［橋川　1977b=2014］からは，橋川が，西南戦争に「ヤマト」と「西郷」という双方の立場があったことを前提にしてその複雑な構図を掴もうとしていたことが分かる。

本対談の焦点を以下に追ってみたい。まず島尾によって，「郷士連中は，いつも城下士たちに押さえつけられて」いた為に「郷士が反撥」するという関係が生まれ，西南戦争時の西郷軍においても「やはり城下士が中心」に編成されて「郷士たちの一部が官軍として戦った」ことさえあったことが語られている［橋川　1977b=2014：45］。その際には続けて，島尾が「これと同じようなことが，薩摩と奄美との間にもあるんです。島に対する軽蔑みたいなものが，薩摩には強くある」と相対的優劣の連鎖を語っていることに応答し，橋川は「ここ（奄美諸島）の土地の人が，薩摩に反撥したり，それを軽蔑したりという面もあるわけでしょう。そういう姿というものは，うまく掴めないものでしょうか」と述べるかたちで自発的な感情の機微に注目している［橋川 1977b=2014：45－46］。橋川は，植民地育ちの島出身者が鹿児島県庁で受けた差別待遇について島尾が語った際にも，「島尾さんのものに，大島から徳之島，徳之島から沖永良部というふうに，なにか南のほうに向かって軽蔑していく。そんなことが書かれていますね」ということで，「島」をめぐる大島と徳之島と沖永良部の相対的優劣の連鎖を意識している［橋川　1977b=2014：47－48］。以上より橋川には，「中心／周縁」のモチーフを二項対立の権力関係に留まらせずに，「周縁」と一括りに捉えられがちな「薩摩」さらには「島」の内部で相対的優劣が再生産され続けていることへの視座があるといえる。

さらに本対談で，島尾は「稲作文化を導入した弥生人たち，これが，いわゆる“倭人”といわれるもの」とした上で「日本は蝦夷と倭と，それとこっちの南島人」の3つに分けることが可能であるとも語っている［橋川　1977b=2014：57－58］。そしてこの話の流れにおいて，島尾が「（薩摩）隼人というのは，ぼくは南島人だと思っています。あれは土着なんです。鹿児島の中で，隼人の系統というのは，虐げられてきた連中なんです。それなのに，薩摩の士族は，おれは薩摩隼人だなんていっている。薩摩の上級武士は，全部関東からきたんですから」と述べたことに対して，橋川は「一種の自己満足ですね」と共感しながら「薩摩人は，二重意識になると思った」と語っている［橋川　1977b=2014：85－86］。このことからは，薩摩士族が土着の人々を実質的には蔑視しつつも形式的には「隼人」を名乗りたいという，建前と本音の倒錯状況が窺える。特に橋川は，「桜島は，薩摩人にとっては，前進を予感させるもの，海への出発を刺激する要素であり，同時に，海への前進を禁ずる象徴でもあった。もう一つ，…背後の山脈の意識がある。隼人的な感性からすると，あの山岳の頂きから，大和の勢力が，中央日本の勢力が迫ってくる」と語りながら［橋川 1977b=2014：86－87］，「中心」と「周縁」の狭間にある「薩摩」のコンプレックスを描いている。

２－１－２　「周縁」の「周縁」で生れていた夢想　―明治維新期頃―

本対談では島尾は，薩摩は「奄美を二百五十年支配した…植民地行政というものがある」故に「植民地支配がなんであるか」を知っており，島津斉彬は「沖縄を通して，中国はなんであるか，

イギリスやフランスがなんであるか，わかっていた」と語ってもいる［橋川　1977b=2014：92－93］。橋川はこの島尾の発言に触発されることで，「西郷には斉彬の真似がちょっとある」とし，西郷の征韓論の解釈の問題性を解くヒントが得られたともいっている［橋川　1977b=2014：94］。このことから橋川は，西郷が斉彬に準じる様な世界と繋がる独自の視座を持っていたことに意義を見出していたといえる。

そして橋川は1978年に初出した「西郷隆盛と征韓論」においては，薩摩藩主・島津斉彬の後継となった島津久光と折り合わずに島流しにあった西郷が，「ヤマト」の政治に違和感を持ち［橋川 1978b=2014 :119］，沖永良部島とは琉球を経て中国や世界に繋がっているという感覚を掴んだのではないかとみている［橋川　1978b=2014 :138－139］。本作品で橋川は，西郷から「生ぐさい政治的活動を続けていく上での，肝心のものが，全部脱落していくというか，なくなってしまった」と考え，「もしかすると西郷さんは，南島の人間，場合によっては，さらにもっと南からやってきた人間ということになるかもしれない」と唱えている［橋川　1978b=2014 :141－142］。そして橋川は日本人離れした西郷像を提示する形で，島流し後に復職した西郷が大久保利通と対立し下野に至った征韓論の不可思議な真偽を取り上げているのである。

橋川は1978年に初出した「日本の近代化と西郷隆盛の思想」においても，西郷の征韓論とは，島で培った思想を携えた西郷が外国帰りの使節団の人々の振舞いに感じた「日本のこれからの方向にも関わる」疑問を「レトリック」や「はずみ」に凝縮させたものであるとみる一方で，「中国と朝鮮と日本，この三国の政治的な連合体を作っていかねば駄目だ」という姿勢もあったはずであると語っている［橋川　1978a = 2014：200－201］。

２－２　国外の変革勢力との連帯の挫折

２－２－１　アジアへ投影されていたイロニイ　―明治維新期頃―

前掲した論考「西郷隆盛と征韓論」［橋川　1978b = 2014］において橋川は国外の革新勢力との連帯のあり方を念頭に，明治初期の征韓論論争には外交問題のみでなく内政問題の要素が関わっていたことを強調している[9]。また本論考で橋川は自身の元々の関心であった，「前近代／近代」を改めてモチーフとしながら，西郷が徴兵制賛成と封建体制維持という矛盾を持っていたことをも唱えている。この橋川の指摘は，もし士族層救済の為に征韓論を主張したとすれば士族層特権を失わせる徴兵令賛成は説明がつかないことからなされているものである［橋川　1978b = 2014：132］。特に橋川には，近代的価値を象徴する法制度レベルへの理解もあった西郷像を示すことで，西郷を近代的価値に鈍感な右翼の源流に見立てて嫌悪するＥ・Ｈ・ノーマンらのスタンスに異論を唱えるねらいが念頭にあったといえる。

その上で橋川は，「明治6年の征韓論においても，西郷さんは，誠という形でぶつかろうとするわけです。単身で朝鮮へ赴き談判に及ぼうという姿勢ですね」と述べて西郷を評価している［橋川 1978b = 2014：135］。その際に橋川は，「…前近代のそれ（大陸膨張論）と，近代のそれ（大陸膨張論）とが，どこでどうつながっていて，どこでどう切れているのか。そこのところをはっきりさせることは，非常に難しい問題なわけです」と語ることで［橋川　1978b = 2014：147］，改めて前

近代／近代のあり方を大陸膨張論から焦点化している。そして橋川は,「ただ,私はどう考えても,吉田松陰などの膨張論は，その後の近代日本の帝国主義的な膨張論とは違う。そういうことを,どうしてもいわざるをえない」とし，近代の膨張論には「西欧の帝国主義の真似」による「冷酷な計算，計画性」があるとしたのに対して，橋川自身が好意を持っているという前近代の膨張論については「前近代の中で，近代でなければできないような，そうした膨張論を主張することは,むちゃくちゃな夢想みたいなものなんです」と述べている[橋川　1978b = 2014：147 − 148]。橋川は，1960年代後半頃の諸作品においては，吉田松陰の倫理・善意や西郷の無私の革命の夢想への意義付けと共に,水戸学に内在する排他性や実利主義への批判をしていたが,本作品では「帝国主義」の「合理的思考」なるものに追従した近代日本への批判が念頭に置かれている。

さらに橋川は本作品[橋川　1978b = 2014]において,既に1960年代後半頃の作品『順逆の思想』[橋川　1973]で描いていた福沢諭吉の明治17年の脱亜論を改めて語り直しながら，西郷の明治6年の征韓論との共通点として，当初はアジアへの強硬路線の意図を持っていなかったものの裏切られた(場合の)反動として唱えられた論といえることを示してもいる。この反動の危うさのニュアンスには，橋川のモチーフ的表現法である「イロニイ」の感情を重視する発想が窺えよう。他方で橋川は両者の差異について，特に国力がまだ小さかった明治6年に西郷が唱えた征韓論の方には「近代の帝国主義の真似でないロジック」として，もし西郷が朝鮮へ平和交渉の大使として赴き殺された際には朝鮮に勝てても背後の清国との戦いの「見通し」がなかったであろうと述べている[橋川　1978b = 2014：150 − 151]。このことから橋川には,「見通し」をたてていなかったことが想定される西郷に,「帝国主義」に染まらない「夢想」にあたるものを見出して評価していたことが分かる。

２－２－２ 「西洋的な論理」が飲み込む「東洋的な感触」 ―明治維新期頃―

橋川は，1978年に初出した「日本の近代化と西郷隆盛の思想―安宇植(あんうしく)氏との対談」で,「西郷についての見方に…単純な見方が伝統的に続いていて，それが好悪，両方の評価につながっているという二重性が感じられます」と指摘しながら[橋川　1978a = 2014：191],「そういう(日本の武士階級による)世論形成というのは民衆が抜けて」おり,「日本というのは，いつも国内政治が中心でずっと流れてきている」ことを危惧している[橋川　1978b = 2014：196]。ここからは橋川が,「国内政治」によって民衆本来の感性が失われた為に，征韓論をめぐる西郷像には好悪のブレがある相対的で外在的な感情が未だに投影され続けているという認識であることが分かる。

橋川のいう「国内政治」への批判の意図については，1977年に初出されている「西郷どんと竹内さんのこと」[橋川　1977a=2014]でより理解出来る。橋川は本作品にて，一般的には封建的反動とみられがちな西南戦争への参加者の中にルソーの民約論を泣いて読んでいた人々がいたことに改めて触れるかたちで[橋川　1977a=2014:166],「西郷さんというものをあまりにも日本の国内政治の矛盾とか，その複雑性とか，そういうものの中に巻き込んで，西郷さんをあまりにも大久保や木戸や伊藤等の論理によって，断定しようとすることには無理がありはしないか」と問うている。橋川にとってルソーとは「一般意志」の提示によって近代における全体性なるものの危うさを予言した人物として認識されていたことを鑑みると[橋川　1968 = 2015]，橋川は西郷を

ルソーと重ねることで，西郷が近代国家成立によって必然的に生まれる自己除外の危うさを重々承知であった故にその反動として前近代的価値なるものを改めて重んじようとした人物であったとみていたのかもしれない。このことは橋川が，「彼は日本以外の国，具体的に申しますと彼が島流しにされておりました奄美大島，あるいは沖永良部島，さらに沖縄から南中国の大陸，という論理の中でこそ，彼の政治的論理というのははじめて生きた意味を持つのであって，それと違う国内政治の論理，もしくはエトスで西郷をそのまま締めくくろうとすると結局うまくいかず，西郷は死んでしまう」として［橋川　1977a=2014 :168 ］，西郷を「国内の論理」に屈せずに逸脱を試みる「島々の論理」なるものの象徴としてみていることからも窺える。

特に1980年に初出された「西郷隆盛の謎―毛利敏彦『明治六年政変』にふれて」［橋川　1980 = 2014］では，橋川が具体的な批判の対象として大久保利通の「西洋的な論理」を挙げている。

ここで橋川は，西郷については「一種東洋的な感触」や「「道義」外交」に価値をおくことで「朝鮮の無礼を東洋的な事実」とみているとする一方で，大久保については「西洋流の国家と国家の既成概念」や「西洋的な論理」を持っていると述べている［橋川　1980 = 2014：224］。元々，実感の伴わない「既成概念」を受容する姿勢自体を批判する視座を持つ橋川にとって，「無礼」という実感を含む「東洋的な感触」を重んじることは必然であったと考えられる。さらに橋川は，この西郷と大久保の違いは，その後の日清戦争期における下関講和会議での李鴻章と伊藤博文との対立要因にも重なるものであるとしている［橋川　1980 = 2014：224］。なお橋川は前掲した作品『順逆の思想』［橋川　1973］においては，近代的価値に重きを置かざるを得なかった伊藤博文と伝統的価値に重きをおいていた李鴻章とを相互信頼のある同志として語っていた一方で，論考「西郷隆盛の謎」の方では「西洋の論理」に依拠するとされる伊藤が，大久保らを通じ，天皇の西郷への信頼関係を「転向」させたとして問題視している［橋川　1980 = 2014：225］。西郷を過大に擁護する一方で大久保を批判するという橋川の構図には，「前近代／近代」の架橋が困難であった戦後社会の在り様が投影されている様に思われる。日本の近代化は西郷が下野した後に大久保路線で実現されたと大まかにはいえようが，戦後日本社会では「前近代を象徴する西郷／近代を象徴する大久保」という対としての関係が未だ分離されたままどちらかを擁護するという偏りを克服し得てない状況にあるものと考えられる。

おわりに

本研究の1章では橋川が，「アジアへの被害／列強からの加害」に対峙出来なかった近代日本の問題点として，①列強から受ける人種差別から生れた「劣等感」を「優越感」という「虚栄心」の創作によって充足させることで「劣等感」と「優越感」とが反転し易い状況となったこと，②劣等感や嫌悪感を伴う「排他性」は人種理論に内在する「合理性」に回収されない「非合理性」があるものの人種差別の意識化・対象化は不可能なこと，等を示していることを挙げた。さらに橋川には，①´日本が「黄禍」というレッテルに媚びた為，西欧とアジアに挟まれた末にアジアに矛先を向けることになったことの告発，②´白人攻撃に走ったとされる平沼騏一郎の「排外性」も，白人によって作られた国際秩序に屈したとされる幣原喜重郎の「合理性」も批判しながら，「新黄禍論」という絶望的抑圧で倒錯したとされる田中義一や松岡洋右への寄り添い，という特徴があることをおさ

えた。

そして2章では橋川が近代日本批判として,「西洋的な論理」に表象される近代国家の「冷酷」で「計画」的な圧力に対し,「東洋的な感触」に表象される「倫理・善意」や「誠・無私」で自己対峙し得なかった為に，コンプレックスの生成および転化による「優劣感」の連鎖が生れたことを危惧していたことを示した。その際に橋川には,「友愛」関係にあるはずのアジアの国に裏切られた際の衝撃によって日本で生まれる反動的な負の感情については「イロニイ」を見出して価値を置く視点があることもおさえた。

橋川にとって，理想郷を想定して現実の精神的な超克を試みる「イロニイ」とは危機的状況下での自己回復の衝動という人間の本能に根差す切実なものとして意義付けられる一方で,「転化」とはその衝動をないものとする偽りにあたるものとしてみなされているといえる。しかし実際の所,「イロニイ」と「転化」には「真／偽の反動」というべき対関係があり,「反動」という現象自体に何らかの感情の機微を発動させるという本質があるように思われる。その為,「イロニイ」や「転化」という「反動」感情と厳密に対になるものは,「反動」感情がそもそも生まれない無関心や他人事などであると考えられる。特に「前近代／近代」をめぐる自我の葛藤を元々の問題意識としていた橋川の場合には，この感情自体が発生しない状態を自己欺瞞と捉えており，その原因を近代の「合理的思考」に想定して危惧しているといえる。

橋川は国民国家が自明とされていた戦中及び戦後の時代状況を生きた思想家である為，所与とされていた近代国家のシステムに抗い得る契機を掬い出すことに意義を見出していたと考えられる。その為橋川は近代以降の社会の歩みを捉える際に，国内法や国際法を含む近代法に基づく実務的政策レベルではなく, 人々の行動の契機となるメタな心情レベルに軸を置いていたといえる。なお1980年代頃を境とした言語論的展開後の現代からみると，国民国家を前提としてそれを心情レベルで克服しようとする橋川の思想は,「右翼／左翼」という従来の強力な枠組からは脱しているといえるものの,「郷土愛」なるものを所与としている等の限界が見受けられる。しかしながら，個々人の多様な「実感」に自己存在をめぐる苦悩という共通性を見出して人々の意識を繋いでいこうとする橋川の歴史像の発想には，多様な「実感」を意識的あるいは無意識的に黙殺せずに「真実」へと高めようとする意味合いにおいて，現代でいう他者性や当事者性の概念をいち早く予感していたところに，その意義があったように思われる。

[参考文献]

クロード・レヴ゛ィ＝ストロース（2017）.『月の裏側』中央公論新社
斎藤環、佐藤優（2015）.『反知性主義とファシズム』金曜日
赤藤了勇（2000a）.「解題」『橋川文三著作集1』筑摩書房
赤藤了勇（2001a）.「解題」『橋川文三著作集5』筑摩書房
赤藤了勇（2001d）.「解題」『橋川文三著作集9』筑摩書房
赤藤了勇（2001e）.「解題」『橋川文三著作集10』筑摩書房
塚田穂高（編）(2017）.『徹底検証　日本の右傾化』筑摩書房
坪井秀人（2005）.『戦争の記憶をさかのぼる』筑摩書房
中島義道（2016）.『差別感情の哲学』講談社
橋川文三(1973).『順逆の思想』勁草書房
橋川文三（2000）.『黄禍物語』岩波書店

橋川文三（2000a）.「日本浪曼派批判序説」『橋川文三著作集1』筑摩書房
橋川文三（1967 = 2000a）.「ロマン派へ接近の頃」『橋川文三著作集1』筑摩書房
橋川文三（1968 = 2000a）.「象徴としての政治」『橋川文三著作集1』筑摩書房
橋川文三（1964 = 2001a）.「昭和超国家主義の諸相」『橋川文三著作集5』筑摩書房
橋川文三（1967 = 2001b）.「安保後八年目の独白」『橋川文三著作集6』筑摩書房
橋川文三（1974 = 2001b）.「日本文化・フォニイ史論雑考」『橋川文三著作集6』筑摩書房
橋川文三（1959 = 2001c）.「広島弁の弁」『橋川文三著作集8』筑摩書房
橋川文三（1967a = 2001c）.「言語と生活と国家」『橋川文三著作集8』筑摩書房
橋川文三（1967b = 2001c）.「対馬幻想行」『橋川文三著作集8』筑摩書房
橋川文三（2013）.『昭和維新試論』講談社
橋川文三（1968 = 2014）.「西郷隆盛の反動性と革命性」『西郷隆盛紀行』文藝春秋
橋川文三（1977a = 2014）.「西郷どんと竹内さんのこと」『西郷隆盛紀行』文藝春秋
橋川文三（1977b = 2014）.「西郷隆盛と南の島々」『西郷隆盛紀行』文藝春秋
橋川文三（1978a = 2014）.「日本の近代化と西郷隆盛の思想」『西郷隆盛紀行』文藝春秋
橋川文三（1978b = 2014）.「西郷隆盛と征韓論」『西郷隆盛紀行』文藝春秋
橋川文三（1980 = 2014）.「西郷隆盛の謎」『西郷隆盛紀行』文藝春秋
橋川文三（1968 = 2015）.『ナショナリズム』筑摩書房
ヘイドン・ホワイト（2017）.『メタヒストリー』作品社
渡辺京二（2013）.『近代の呪い』平凡社

［注］

1）　橋川文三については、以下の論文を発表している。山之城有美「戦後日本における橋川文三の「1930年代像」―「日本浪曼派批判序説」を素材として―」（『人間社会研究科　紀要　第20号』日本女子大学大学院人間社会研究科、2014年）、同「社会的自我像をめぐる普遍性／特殊性の考察―橋川文三が語る日本ロマン派の「煩悶」の論理―」（『人間社会研究科　紀要　第21号』日本女子大学大学院人間社会研究科、2015年）、同「橋川文三―「イロニイ的存在」としての「煩悶」のビジョン―」（『戦後思想の再審判』法律文化社、2015年）、同「橋川文三が語る「煩悶」の内在的構造―1970年代における「仮構」性を超克するビジョン―」（『人間社会研究科　紀要　第22号』日本女子大学大学院人間社会研究科、2016年）、同「「煩悶」の源流としてのアジア主義―『順逆の思想―脱亜論以後―』を素材として―」（『人間社会研究科　紀要　第23号』日本女子大学大学院人間社会研究科、2017年）。本論の内容は、これらの論文と重複する部分がある。

2）　『日本浪曼派批判序説』は、同人雑誌『同時代』の第四号（1957年3月15日発行）から第九号（1959年6月5日発行）において最終章を除き連載発表され、その後『日本浪曼派批判序説』（1960年2月、未来社刊）に初めて収められた［赤藤　2000a:359 − 360］。なお本論考のタイトルの表記には「漫」ではなく「曼」が使用されている。橋川は本論考にて、日本ファシズムとは郷里を想う「原始的心情」であるパトリオティズムから成っていると唱えていた。そして橋川は「都市のインテリ」を中心とした日本ロマン派と、「非都会的インテリ層（＝青年将校）」を中心とした農本主義とは、共に近代主義批判を念頭に「郷土主義」を目指しながらファシズムに回収されていったと論じている。

3）　『昭和超国家主義の諸相』は、1964年11月15日発行『現代日本思想体系』第31巻「超国家主義」（橋川文三編集・解説、筑摩書房刊）に発表され、『近代日本政治思想の諸相』（1968年2月、未来社刊）に初めて収められた［赤藤　2001a:368］。橋川は高度成長期にあたる1964年に初出した本作品にて、戦後の官僚制度や会社制度への批判を踏まえながらも、家父長制度への抗いという潜在的意図を持ちながらテロを通じて「父親殺し」を謀ったとされる1930年代頃の煩悶青年を近代国家への抗いの原初形態とし、中間形態、完成形態という多様な現れの像を語っている。

4）　『昭和維新試論』は、季刊雑誌『辺境』（井上光晴編集・辺境社発行）第１号（1970年6月）から第2次第1号（1973年10月）まで、休載された第6号を除き10回連載で発表された。著者の没後、全文が単行本として刊行（1984年6月17日、朝日新聞社）された［赤藤　2001d:370 − 371］。文庫化にあたっ

ては1993年に刊行された朝日選書版が底本とされ、2007年には筑摩書房が刊行し、2013年には講談社が刊行している。この作品で橋川は明治後期頃から起こった「地方改良運動」を焦点としながら、この運動にはパトリオティズムというべき郷土主義に根ざす契機が確かにあったものの、神社統合等を通じて官僚的国家再編に回収されるに至ったと捉えている。

5) 橋川のこの視座は、1967年に初出された論考「言語と生活と国家」［橋川　1967a=2001c］におけるテーマである「国家の文法」から、より理解し得る。橋川は、戦中の実感を想起させて「国家は、いぜんとして私の一身と同一化されたものであり、それがなんらか私たちの心意をこえた法則に支配される言語＝象徴体系の一つにすぎないなどとは想像しえなかった。国家はいわば文法抜きの絶対的な同一化のシンボルであった」と語りながら、「言葉はたんにものを指示する手段ではなく、自己自身を映して見る運命的な鏡でもあった。私たちがものごとを認知する唯一の手段としての言語が、実は同時に人間の認識を曖昧にする呪術的な表現作用をも含んでいた」と「国家の文法」が自己認識に関わる深刻な問題であることを指摘している。その上で橋川は、「すべての言語が、個別的な「文法」をこえて、より普遍的な法則に従うべきことを忘れてはならない」と主張することで、言語を通じて近代国家に回収されない回路を模索している［橋川　1967a=2001c:41 − 42］。

　またこのことは橋川が、同じく1970年代後半に幼少期から青年期にかけての原体験を追想しつつ、「都市／地方」から「地方／島」を導いて「島」に至るという発想を語りながら、「国家の論理」批判を「島」をめぐる西郷論で語っていることからも補強することが出来る。橋川にとっての「故郷のイデア」が生まれ故郷である対馬という「島」にあることは、1967年に初出された「対馬幻想行」で、橋川が久しぶりに対馬に帰郷した際の心情について「…私には、多年あこがれをいだきつづけたその島の姿が、一目で対馬と私に断定できるとも思っていなかったのである。何しろもう二十幾年も私はその姿を見てはいない。私の記憶よりももっと奥深い何かの力が、私にそれと断定させたのかもしれない。プラトンの想起説を真に受けるならば、対馬は私の故郷のイデアであったのかもしれない」と語り［橋川　1967b = 2001c:9］、それは「実にささやかな印象や記憶」から成る「郷土感情」を呼び起こすものであると意義付けている［橋川　1967b = 2001c:18 ］。その為橋川は、この作品で自らの幻想の記憶と感情を重視し、「その（子供時代の船旅）ながいながい船路の記憶の中から、そこだけ忘却の水底に沈まないで鮮かに浮かんでくる一つの光景」として「幻の宮の思い出は、その日以来、私の心の中にだけ、ほとんど神秘化された記憶としていだかれていた」と語ることで［橋川　1967b = 2001c:20 − 21］、自身の幼少期の記憶を通じて「郷土感情」というパトリオティズムを想起しているといえる。

　さらに橋川は、1967年に初出した「ロマン派へ接近の頃」にて「地方／都市」をテーマに、高校生になって初めて東京暮らしを始めた際に近代都市に「幻滅」した実感を「「巨大な田舎」であり、自乗化された「地方」にすぎなかっ」たと表現しつつ、「日本の現実への軽蔑とアパシイそのものが、そのままさに民主主義的なロマンティシズムのイロニイ」として「日本ロマン派的な批評精神への接近の契機」になったと語っているのである［橋川　1967 = 2000a:216 − 217］。なお橋川は広島という「地方」の原体験については対馬という「島」から帰住した際の幼少期の挫折の記憶として既に1959年に初出した「広島弁の弁」で語っている。

6) 1970年前後の橋川は作品『順逆の思想』［橋川　1973］にて、冷戦下でのアメリカ追従外交故に、日本は戦中のアジアへの加害に対する独自のアプローチ欠如はもとより、アメリカから受けた戦中の被害への無自覚化をも示唆している。そして本作品にて橋川は、この問題は明治期の政治家達の「列強への意図的恭順」した外交に起因しており、その心情は大正期の大衆に継承されていったとみている。その際の橋川の語りからは、明治期の政治家達が「敬愛／侮蔑」の観点から「興亜／脱亜」の狭間で揺れていたとした上で、「信頼／侮蔑／合理的思考」という3段階の発想が窺える。

　この発想は、1968年に初出された『ナショナリズム』［橋川　1986 = 2015］で橋川が語る明治維新期像でも見受けられる。この作品で橋川は、水戸学派が武士エートスとして唱えていた排外的嫌悪感に内在する露骨な猜疑心や民衆不信を問題視しているのである。そして橋川は、この武士エートスに同化するかたちで実力・能力に価値を置く中間層と、郷土の民衆の生活実感を伴った在郷中間層とに、中間層が再編・分離されていったことに注目している。特に橋川は、武士の排外的エートスの影響下で編成された軍隊組織に入った民衆が、身分的上昇意識・優越感故に、一般民衆から感

じた疎外感を問題視している。

なお『順逆の思想』の「あとがき」には、「「初出覚え書き」によってもわかるが、本書収録エッセイは雑誌『中国』にのせたものが大きな部分を占めている」と記され、「近代日本と中国との交渉にかかわりのある人物や問題について述べたものばかり」が収録された評論集であるとされている［橋川 1973：415－416］。

7）『黄禍物語』は、1970年8月号『中国』（第81号、中国の会編集・徳間書店発行）から、82号、84号、87号、88号、90号、92号、94号、95号、97号、99号、101号、103号、105号、107号（1972年10月）の各号に15回連載で発表されたのち、大幅な編集作業が行われ、単行本として刊行（1976年8月25日、筑摩書房刊）され［赤藤　2001e:392］、岩波現代文庫（2000年8月17日、岩波書店刊）にも収められた。

8）『西郷隆盛紀行』に掲載されている1968年に初出された論考「西郷隆盛の反動性と革命性」［橋川 1968＝2014］において橋川は、西郷隆盛は大陸侵略の元凶ではなく、「左翼／右翼」といった括りを超越した「無私」の革新性を持っていたとして擁護している。特に橋川は、ルソーの日本への紹介者・中江兆民と知友であり、ルソーの民約論を泣きながら読みつつ薩摩軍として西南戦争に参加した熊本民権派・宮崎八郎を挙げることで、西南戦争に流入したエネルギーの多様さを描こうとしている［橋川　1968＝2014：18－19］。この橋川の西郷像には、西南戦争を「第二革命」とみる視座があることから、近代国家成立後の日本の歩み自体を批判しようとする視座が捉えられる。

9）その理由として橋川は、西郷の征韓論が明治8年の江華島事件や明治43年の日韓併合をはじめとする大陸侵略主義の一環として捉えられていることを念頭に、「私の考え方は、あるいは間違っているかもしれませんが、幕末の志士たちからの征韓論の系譜、その流れの一つとして、西郷の征韓論というものを、位置付けておきたいのです。佐藤信淵や吉田松陰の征韓論ないし大陸膨張論は、いわゆる外交問題とは関係のない、単なる抽象論にすぎなかったのだ」と論じている［橋川　1978b＝2014：123］。

10）橋川には土着的なパトリオティズム感情が近代国家の合理的思考に操作されることで「優劣感」が生み出されることを危惧する視座があるが、この発想の原点は国家間戦争時に「敵味方」を私情を挟まずに峻別するという人間心理の不可解さへの関心にあった様に思われる。橋川は1968年に初出した論考「象徴としての政治」（1968＝2000a）において、「友＝敵関係の原理」を唱えたカール・シュミットが、バイブルにある「汝の敵を愛せ」の「敵」とは政治的なものでなく私的憎しみがあるものが対象とされていることを強調しているとみている。その際に橋川はこの極限的な心理状況について、近代国家への忠誠が作り出した人為的なものであり、個人的な「愛憎感」ないままに戦闘時に限って殺しあうという不自然な状況が生れるとみているのである。特に橋川は、同人物を休戦時には友愛対象とし戦闘時には殺害対象と認識することは、独特の「純粋な表現行為」というべき想像力を働かせないと難しいことであるという主旨を述べている。近代国家の合理性と友愛感情の狭間で倒錯しながら戦場で「敵味方」を峻別するという橋川のこの人間心理の捉え方は、パトリオティズムと技術合理的思考の狭間で倒錯しながら「優劣感」を強化していったとされる本論考で扱った橋川のモチーフの究極型と考えられる。